

# 『ルース』にみる看護と感化力 — 『荒涼館』との比較をつうじて—

西垣佐理

## 0 はじめに

ヴィクトリア朝が栄華を極めていた 1850 年代は、看護に関する言説がフローレンス・ナイティンゲールの登場により大きく変化した時代でもある。ヴィクトリア朝小説においても新しいタイプの看護師や看護人が登場する。<sup>1</sup> その代表的作品の一つがエリザベス・ギヤスケルの長編第 2 作『ルース』(1853) である。この作品では、「転落の女性」(the fallen woman) であるヒロインのルース・ヒルトンが、物語の後半田舎町の看護師として活躍し、町の人々から感謝されることとなるが、元恋人の看病を行った後に彼から伝染病をうつされ、結果として亡くなってしまふ。

ここで、ルースの行う看護に関しての疑問点が二つある。第 1 に、物語の終盤で元恋人であるベリンガムを看病した際、ルースの看護行為は彼に対して道徳的感化力をもたないことであり、第 2 に、シャーロット・ブロンテがギヤスケルにあてて書いた手紙の中で、「なぜルースは死ななければならないのでしょうか？」(Brontë 200) という問いを投げかけているように、ルースが命を賭してまでベリンガムを看護する必然性が見えにくいことである。ヴィクトリア朝文学において、女性の感化力はしばしば男性を道徳的に導き、更生させるために用いられており、看護行為はその点で重要な意味を持つはずなのに、である。

看護師(人)が看護行為を通じて自らを犠牲にする物語として、『ルース』と同時代に発表されたチャールズ・ディケンズの『荒涼館』(1852-53)がある。『ルース』と『荒涼館』が看護のテーマで比較されることはこれまでほとんどなかったように思われるが、両作品には多くの部分で共通点があり、ゆえに『ルース』における看護の意義を考える上で大いに役立つと思われる。そこで本稿では、女性登場人物による看護行為の物語内における位置づけについて『荒涼館』との比較をつうじて考察し、とりわけ『ルース』における看護の意義についてプロフェッ

シヨナリズムと女性の感化力という側面から検討していきたい。

## 1 時代背景 — 看護職に対する歴史認識

ヴィクトリア朝文学で社会問題としての看護のテーマが大きく取り上げられた初期の作品として、1842-43年に発表されたディケンズの『マーティン・チャズルウィット』がある。この作品で登場した産婆兼看護師ギャンプ夫人や病院看護師ベツィ・ブリッグらの姿は、1840年代の看護師の現状を余すところなく伝えている。当時の看護師はギャンプ夫人のように労働者階級出身で、アルコール中毒気味の中年婦人であることが多く、さらに看護師としての教育や訓練を受けたものもほとんどおらず、患者に対する扱いも酷い。ギャンプ夫人の登場は、イギリス社会に看護師・医療改革を促す契機ともなったのである。1850年代に入っても看護師の地位はギャンプ夫人の時代とはさほど変わらず、向上の萌芽はなかなか見られなかった。その一因として、看護師という職業は Robert B. Shoemaker が述べているように、公的な職業というよりは母から娘へと伝えられる家事労働のノウハウの一部であり、家庭内における女性の仕事の一つとして認知されていたというのがある。

“As wives and mothers, women were expected to provide medical care for their families. Girls learned ‘physick’ form their mothers, and women augmented their skills from manuals of housewifery.” (Shoemaker 180)

また、Jane Rendall が「看護師は 1851 年の国勢調査ではプロの職業ではなく家庭使用人の形で登録されていた」(Rendall 75) と述べているように、『マーティン・チャズルウィット』出版以降でさえ、看護師は真つ当な専門職とは認められていなかったのである。看護は家庭で行うものという認識が一般的で、病院や救貧院における看護師の質は極めて低かった。そのせいもあってか、初期ヴィクトリア朝文学に登場する看護人たちの中でプロフェッショナルの看護師の数は非常に少ない。ただ、チフスやコレラといった伝染病の度重なる流行と科学や医療の進歩、そして、エドウィン・チャドウィックに代表される公衆衛生への関心の高まりは確実に文学に影響を及ぼしており、物語内における看護の質も徐々に高まってき

ていた。1852-53年という時代は、まさにフローレンス・ナイティンゲール登場直前という時代でもあり、看護に関する言説が語られるのにふさわしい時代でもあったと言えよう。

## 2 『荒涼館』にみる看護

それでは、『ルース』における看護の意義を具体的に考察する前に、比較対象として『荒涼館』における看護の場面を簡単に見ていきたい。『荒涼館』でみられる看護は、主としてヒロインのエスター・サマソンによって行われている。物語中盤、エスターは伝染病にかかった十字路掃除人の少年ジョーを看病したメイドのチャーリーを看護する。チャーリーは回復するが、エスター自身が彼女から感染し、回復はするものの彼女の美貌は病のせいで損なわれてしまう。

エスターはジャンディス家に引き取られた一族の孤児エイダ・クレアのコンパニオン兼ガヴァネスであり、さらに荒涼館の家政一切を取り仕切る家政婦でもあるが、職業看護師ではない。彼女の看護のやり方は、以下のように描かれる。

They put a bed for me in our sitting-room; and by keeping the door wide open, I turned the two rooms into one, now that Ada had vacated that part of the house, and kept them always fresh and airy. (BH 459)

引用部分に見られるような部屋の換気および清浄さに関して、Lavinia Mitton が“Early Victorians believed that disease was caused by foul air, or miasma, given off by stagnant water and stinking cesspools.” (Mitton 5) と言うように、初期ヴィクトリア朝の人々は病が汚染された空気や水によって引き起こされると考えていた。そのため、換気と病室の清掃はチャドウィックやナイティンゲールらが提唱した当時新しいとされた感染予防の方法であり、それをを用いるエスターは公衆衛生に関して高い意識を持っている人物だということが分かる。さらにエスターは、自分が患者の立場になった時でさえ自ら看護人としての主導権を保ち、チャーリーに細かな指示を出す。このように、彼女は有能で献身的な家庭の主婦かつ看護人であり、ゆえにヴィクトリア朝中流階級の理想的女性として描かれているのである。

また、チャーリーがジョーを看病する場面ではプロの看護師も匹敵するほどだ

と描かれている。

My little Charley, with her premature experience of illness and trouble, had pulled off her bonnet and shawl, and now went quietly up to him with a chair, and sat him down in it, like an old sick nurse. Except that no such attendant could have shown him Charley's youthful face, which seemed to engage his confidence. (BH 451)

これらの例が示すように、エスターもチャーリーも共にアマチュアでありながら看護人として有能だと指摘することで、ディケンズは職業看護師よりも家庭人による看護を称揚しているのである。さらに、エスターの看護の意義は、彼女がジョーから始まる伝染病の階級移動を食い止めたことにもある。<sup>2</sup> エスターはエイダを決して自分の病室に入れなかったことで、自分から先への感染を防いだのだ。

エスターは看護がもとで感染し、回復後容姿を損ねるのだが、それが彼女をより「義務」の遂行へと向かわせる。結果、美德の報いとしてエスターはかねてから思いを寄せていた医師アラン・ウッドコートと結婚することができた。また、看護による美貌の喪失は別の意味も持っている。エスターの美貌は母親譲りなのだが、実は彼女の母親こそが「転落の女性」なのである。エスターの母親は、その美貌によって準男爵サー・デッドロックに見初められ、レディ・デッドロックとなっているが、婚前に彼女とキャプテン・ホードンとの間にできた不義の子がエスターである。したがって、エスターはいわば母親の過ちを刻印された存在とも言える。女性の美貌がセクシュアリティをも表すがゆえに、エスターの美しい容貌が看護とそれによる感染によって損なわれることで、エスターは母親との類似を疑われることがなくなる。同時に、エスターが美貌による過ちを繰り返す恐れもなくなるのである。このように、『荒涼館』における看護は、中流階級としての美德を備えた女性性を発揮する行為として、そして看護が他者に対して道德的感化力を発揮する場として用いられているのだといえることができるだろう。

### 3 『ルース』にみる看護

一方、『ルース』にみられる看護の位置付けを見ていくことにする。まず、『ルース』全体において看護の場面は大きく3つに分かれる。第1にウェールズの宿でベリンガムが原因不明の病に冒された際にルースが行う看護の場面、第2にルースがガヴァネスの職を追われた後、町の看護師となってチフスの蔓延した病院で婦長として尽力する場面、そして、第3に物語の最後で同じくチフスにかかったベリンガムを看病する場面である。これらの場面をそれぞれ概観し、『ルース』における看護の意義を考察していきたい。

第1のウェールズの宿の場面でのルースは、自分が「転落の女性」であるということをはじめて認識したばかりの無垢で世間知らずの少女である。ベリンガムの愛情のみで行う彼女の看護は、医師の指示に従い、懸命で注意深いものであり、欠けているところは「経験の代りにあふれんばかりの愛情」(Ruth 68)で補われてはいるものの、あくまでもそれはアマチュアのものである。ゆえに医師に「若すぎて重病患者の責任を負うのは無理だ」(Ruth 68)と言われ、結局ベリンガムの母親がやってきて彼に対する看護をこれ以上続けることができなくなってしまう。ここの看護場面で大事なのは、ルースは明らかに彼女の女性性と感化力を愛情あふれる看護行為によって打ち出そうとしているのだが、ベリンガムにその感化力が伝わる前に、母親の介入によって中断させられたということである。本来ならば、ここで看護によって彼女の道徳的感化力が十分に発揮されていれば、ベリンガムは改心した可能性も考えられたかもしれないが、そうはならない。また、ルースがヴィクトリア朝の道徳的規範から逸脱した「転落の女性」という存在だとはじめて認識してしまったのも、この看護場面を通してなのは非常に興味深い。

第2の場面でルースが看護師になることを決めたのは、ひとえに生活のためである。つまり、ブラドショー一家でのガヴァネスとしての仕事が、彼女の過去の暴露とともに失われたために収入を得る必要に迫られていたからである。また、ルースは自分が看護師として天性の才能を持っていることを自覚しており、自分にふさわしい職業だと考えていたからでもある。物語の最初のほうから、“In the old days she [=Ruth] could never bear to hear or see bodily suffering in any of God’s meanest creatures.” (Ruth 82) とあるように、彼女はどんなにか弱い生き物であっても病んでいるものが苦しんでいるのを見たり聞いたりすることに我慢できず、助けの手

を差し伸べるところがあった。また、ルースがジェマイマと看護師になることに関して会話する場面で、看護師として患者の身体に優しく触れる才能を持っていると語っている。

“... I like being about sick and helpless people; I always feel so sorry for them; and then I think I have the gift of a very delicate touch, which is such a comfort in many cases. And I should try to be very watchful and patient. . . .” (Ruth 318)

またルースは、看護師として必要な教養や、これから必要とされる看護師像を以下のように描いている。

“You have not thought about this so much as I have, or you would not say so. Any fastidiousness I shall have to get rid of, and I shall be better without; but any true refinement I am sure I shall find of use; for don't you think that every power we have may be made to help us in any right work, whatever that is? Would you not rather be nursed by a person who spoke gently and moved quietly about than by a loud bustling woman?” (Ruth 318-19)

この場面で、当時の看護師の実態が明らかにされると同時に、これからの看護師に必要な資質というものも明らかにしている。実際の看護の仕事に入った後、ルースは最初こそショックを受けるが、プロフェッショナルとして立派に職責を果たし、徐々に町の人たちから看護師としての信頼を得ようになる。彼女の看護師としての役割はこれにとどまらず、チフスが蔓延する町の隔離病棟に婦長として赴き、献身的な介護をすることによって町の人々から「あがないのために」看護をしていると認知される。そして、危険を顧みず自ら看護を実践し、病を収束させたことによって彼女の名誉が回復され、病院の理事会や医師団から感謝状まで贈られるという段階に至って、ルースの看護は単なる仕事にとどまらず、英雄的行為とみなされるようになる。それは、数年後にスクタリの地に赴いたフローレンス・ナイティンゲールの姿とも重なる、時代のヒロインとしての看護師像を予期させるものであると言えよう。

それに対して第3の看護場面は、第2の看護の延長上にあるのだが、それまでの例とは大きく異なる点の一つがある。それは不特定多数の患者たちとは違い、かつての恋人ベリングラムが患者だということである。ルースは、医者 Mister・デイヴィスが反対するにもかかわらず、自分がベリングラムの看病をしなければならぬと言い張る。ルースがベリングラムの看護を申し出たのは、彼が息子レナードの父親だからとは言うものの、未練があるからというわけでもない。それはルース自身が言うように、本人にもわからない思いなのである。

“I have been thinking—but I do not know—I cannot tell—I don’t think I should love him, if he were well and happy—but you said he was ill—and alone—how can I help caring for him?—how can I caring for him?” (*Ruth* 361)

ただ、ここで一つ言えるのは、引用の下線部にある「彼は病に冒され、そして一人きりである」という事実である。以前、ウェールズの宿屋でベリングラムが病に陥った時、ルースはベリングラムの母親の介入によって最後まで看病することができず、ゆえに今度こそベリングラムを最後まで見届けたいという密かな願望があったとしても不思議ではない。ただし、今度は自分の存在を明らかにしようとはせず、病状が好転する前に彼のもとを離れるという条件で看護を引き受け、プロフェッショナルとして仕事を全うする。しかし、ルースの献身は病の峠を越えたベリングラムがルースの顔を認めた際に言った「睡蓮の花はどこ？彼女に髪にさしたあの睡蓮は」(*Ruth* 364) という言葉によって無に帰してしまう。それは、ベリングラムがルースの美しさのみに関心があり、彼女のこれまでの献身や看護からほとんど道徳的感化を受けてない証拠でもあるからなのだ。いずれにせよ、この後すぐルースは病が伝染して亡くなってしまうのだが、死後ベンソン家を訪れたベリングラムは、彼女の遺体を見てもその死に顔の美しさにしか関心がなく、金銭で息子レナードの世話を頼もうとして Mister・ベンソンの顰蹙を買うなど、彼が最後まで改心することはなかった。ヴィクトリア朝において女性の感化力とは、Catherine Judd が指摘するように基本的に母親の感化力をさす。確かにルースは母親だが、シングル・マザーで “a tainted version of motherhood” (Judd 83) しか示せない。それが、ルースが彼に感化力を発揮できない理由だとも言えるのではないだろうか。

#### 4 まとめ—『荒涼館』と『ルース』における看護と感化力

これまで、『荒涼館』と『ルース』における看護の場面を見てきたが、ここで両作品の共通点と相違点を明らかにしてみたい。まず、ヒロインとしての共通点にあげられるのは次のようなことである。すなわち、エステルもルースもともに孤児であり、ガヴァネスを基本的生業にしていたという点、二人とも美貌の持ち主であったという点、そして「転落の女性」と関わりがあるという点である。エステルの場合は母親であるレディ・デッドロックが、そしてルースは彼女自身が転落の女性である。

このようなヒロインたちが看護行為に携わる際の共通点は主に4点ある。第1に、エステルもルースも看護人として優れた技量・資質を備えているという点である。これはギャンプ夫人に見られた旧来型の看護師像を覆し、社会で新たに必要とされた「レディ・ナース」という、中流階級の女性たちが担うべき職業への転換を暗示している。第2に彼女らの患者たちは『荒涼館』では天然痘、『ルース』ではチフスという違いはあるにせよ、いずれも伝染病にかかっているという点である。これは両作品が出版された1853年ごろではよくあることで、事実、1853-54年にはチフスが流行していたのである。伝染病は個人の病ではなく、社会全体に広まる性質を持つので、伝染病に立ち向かう看護師・看護人は、患者個人を癒すと同時に公衆衛生という点で社会に貢献していることにもなる。だからこそ、『荒涼館』ではエステルの看護が病の階級移動を防ぐという意義を付与されるのであり、『ルース』においては、ルースの看護行為が実際に共同体を救い、町の人々から感謝され称賛を受けることになるのである。第3に、エステル・サマソンもルースも患者から病気をうつされ、何らかの犠牲を払うところも共通している。第4に、二人はともに「転落の女性」と関わりがあるがゆえに、罪を背負って生きていかななくてはならない存在だということである。そして、その罪のあがないとして、二人に課せられた行為が「看護」であり、それによる感染がいれば罰となっているのだ。これらの共通点をまとめるならば、エステルとルースは、ともに優れた看護人であり、伝染病と戦うことで社会に貢献するが、他方、看護を通じて自ら感染し、結果的に「転落」の罪をあがなう存在なのだ、と言えるだろう。

しかし、両者の看護には二つの相違点があげられる。第1に、『荒涼館』のヒ



ロイン、エステル・サマソンの看護行為があくまでも中流階級女性の「義務」(“duty”)の一環として行われているのに対し、ルースのそれは完全に自分たちの生活費を稼ぐための「仕事」(“profession”)となっていることである。換言すると、プロフェッショナルとアマチュアの違いでもある。実際の仕事内容としてはそれほど大きな違いはないものの、エステルのアマチュアリズムとしての看護が主に中流階級の女性性、言い換えるならば、良き妻・良き母として必要とされる美德を引き出す要素として用いられ、それはアラン・ウッドコートとの幸福な結婚によって報われている。それに対し、ルースのあくまでも報酬として金銭を得るプロとしての看護行為は、その献身と社会的意義により英雄的行為と認められ、ルースの罪もあがなわれたと町の人々にはみなされるものの、その後のベリンガムに対する道徳的感化力のなさからもわかるように、男性に対する女性性や美德の発露を必ずしも意味しないということなのである。

第2の相違点は、看護行為を通じて払わねばならなかった犠牲が同じものではないということである。エステルは病の感染によって自らの美貌を失うが、ルースは美貌の代りに命を落とすことになる。エステルは自らの美貌を失った後、義務のみに生きることによって母親からの罪の影響から逃れ、最終的に結婚し家庭をもつにふさわしい女性としてアラン・ウッドコートに認められることとなる。以下の引用に見られるように、物語の最後でエステルは自分の美貌がなくとも人々に認められることを誇りに思っている。

‘And don’t you know that you are prettier than you ever were?’

I did not know that; I am not certain that I know it now. But I know that my dearest little pets are very pretty, and that my darling is very beautiful, and that my husband is very handsome, and that my guardian has the brightest and most benevolent face that ever was seen; and that they can very well do without much beauty in me—even supposing—. (BH 914)

ところがルースの場合、確かに罪のあがないとしての看護は社会的に認知され結果として名誉を回復するのだが、罪の根本、すなわち誘惑と転落のきっかけと

なったルースの美貌は最後まで保たれたままなのだ。ルースがベリンガムと会うきっかけとなった舞踏会にお針子としてでなければならなくなったのは、雇い主の婦人服仕立て屋ミセス・メイソンがルースの「感嘆すべき美貌」に目を付けていたからである。

But, looking up, she [Mrs Mason] was struck afresh with the remarkable beauty which Ruth possessed; such a credit to the house, with her waving outline of figure, her striking face, with dark eyebrows and dark lashes, combined with auburn hair and a fair complexion. No! diligent or idle, Ruth Hilton must appear to-night. (*Ruth* 13)

死に顔も、以下の引用にあるようにベリンガムが感嘆の念をもらしてしまうほど美しく、穏やかな顔立ちなのである。

He [Mr Donne=Mr Bellingham] muffled himself up in his cloak, and shuddered, while Sally reverently drew down the sheet, and showed the beautiful, calm, still face, on which the last rapturous smile still lingered, giving an ineffable look of bright serenity. . . .

He was awed into admiration by the wonderful beauty of that dead woman [Ruth].

“How beautiful she is!” said he, beneath his breath. “Do all dead people look so peaceful—so happy?” (*Ruth* 369)

これらの引用に見られるように、ルースは結局のところ自らの美貌という躰きの石から最後まで逃れられなかったということになる。だからこそ、彼女は看護の対価として命を差し出さなければならなかったのだ、と言えるのではないだろうか。結局二人のヒロインの運命を大きく分けることになる要因は一体何だったのだろうか。

二人のヒロインの違いは次の2点に集約されるだろう。それは、先にも述べたように看護人としてプロフェッショナルかアマチュアかという違いと、「転落」

の罪と結びついた「美貌」が保たれるか否かという点にある。社会的に意義ある看護行為に従事する、という点ではどちらも同じなのだが、女性性や美德の発露が見られるのはあくまでもアマチュアとしての看護のみで、プロとしての看護は社会的に認められ称賛されるものの、女性として他者に道徳的感化力を及ぼすということはない。また、両作品を通じて見られるのは、女性の「美貌」は道徳的過ちの元となりうるという価値観である。Marion Shaw が “As in *Ruth and Sylvia’s Lovers*, a woman’s beauty is a snare that can lead men into wrong or desperate actions.” (Shaw 82) と言っているように、「女性の美貌は男性を誤った行動へと導く罠」ととらえられているということなのである。

ゆえにエスターは母親の「罪」から逃れるために美貌を失わなければならない、美貌を失わなかったルースは命を落とさなければならなかったのだ。このように見てくると、ヒロインの運命という点では非常に異なっているように見える二つの作品が、実は同じ女性観と看護についての認識に支えられていることが分かる。すなわち、女性にとって美貌は転落への罠であり、女性による看護はアマチュアであってこそ真にレスpekタブルだという価値観である。<sup>3</sup>

『ルース』という作品を単体で読むと、ヒロインは看護によって自らの名誉を回復しながら、なぜまた看護によって命を落とすことになるのかがわかりにくい。事実、これまで多くの批評家たちが最後の部分は蛇足だと述べている。しかし、『荒涼館』— すなわちヒロインが看護を通じて美貌という罪のしるしを失うことで、美德とその報いとしての幸福な結婚に至る物語 — をいわば補助線として読むことで見えてくるのは、死んだ後までもなお保たれるルースの美貌、すなわち罪の原因こそが、献身的な看護にも関わらず彼女が最後までベリンガムに最後まで道徳的感化力を及ぼしえなかった理由だということなのである。というのも、看護行為が女性性を発露し道徳的感化力を及ぼすことで、いわば誘惑行為の代替行為になるとすれば、美貌はさらに直接的なセクシュアリティの記号であり、それゆえ、看護の持つ道徳的感化力を妨げる要因となるからである。そのため、たとえプロの看護師としては社会的に名誉が回復されたとしても、一人の女性として犯した罪の重さは最後まで拭い去られることはないというヴィクトリア朝的道德観がルースの死という結末を求めたのだ。それは、やはり美貌の「転落の女性」である『荒涼館』のレディ・デッドロックが死ななければならなかったのと同様で

ある。しかし、ただのたれ死んだように見えるレディ・デッドロックとは異なり、ルースの死は看護によってもたらされた。看護を天職とする彼女は、看護によって社会的に認められ、看護によって罪をあがなったのである。ルースは当時まだレスpekタブルでなかった職を通じて社会に認められ、その職に殉じたわけで、その意味でまさにプロとしての理想的な看護師像を体現しているのだ。その反面、彼女は「転落の女性」だったからこそ地位の低かった看護師という職についたわけでもあり、最後には転落の罪を自らの死であがなうことになる。ギャンプ夫人が当時のプロフェッショナル・ナースの現実を体現した人物だとすれば、ルースというヒロインはまさに過渡期にあった当時のプロフェッショナル・ナースの理想と現実を一身に体現した人物だといえるのではないだろうか。

#### 注

本稿は第 20 回日本ギヤスケル協会全国大会（2008 年 9 月 30 日、於神戸大学）における研究発表『『ルース』にみる看護と感化力 — 『荒涼館』との比較をつづいて —』に基づいて加筆修正したものである。

\*引用文中における下線は全て筆者によるものである。

- 1 本稿における「看護師・看護人」の定義・呼称の違いをここで明らかにしておく。*OED*によると、“nurse”とは、「(1) 赤ん坊に乳をやる女性（乳母）、(2) 他人の世話を行う人、(3) 病人の看護を行う人（一般に女性）＝看護師」とあって、看護をする主体は大抵女性である。一般に、(1) を “wet-nurse”、(2)・(3) を “dry-nurse” と呼ぶ。本稿では、基本的に (2)・(3) の定義で扱い、職業看護師を「看護師」、および家庭で看護を行う人を「看護人」と区別して表記する。
- 2 看護による病の階級移動の阻止という点に関しては、拙論『『荒涼館』にみる看護・ジェンダー・階級』の pp.48-49 に詳しい。
- 3 ディケンズ文学における女性による看護のアマチュアリズム称揚は、男性のプロフェッショナルの医師との二項対立という構造でも考えられる。これに関しても拙論『『荒涼館』にみる看護・ジェンダー・階級』 pp. 45-48 を参照のこと。

## 引用文献

- Brontë, Charlotte. “32. Charlotte Brontë on *Ruth*, in letters to Elizabeth Gaskell.” *Elizabeth Gaskell: The Critical Heritage*. Ed. Angus Easson. New York: Routledge, 1991.
- Dickens, Charles. *Bleak House*. 1853. Oxford: Oxford UP, 1996.
- Gaskell, Elizabeth. *Ruth*. 1853. Harmondsworth: Penguin, 1997.
- Judd, Catherine. *Beside Seductions: Nursing and the Victorian Imagination, 1830-1880*. Basingstoke: Macmillan, 1998.
- Mitton, Lavinia. *The Victorian Hospital*. Princes Risborough: Shire Publications, 2001.
- 西垣佐理. 「『荒涼館』にみる看護・ジェンダー・階級」. 『関西学院大学英米文学』第52巻(2008年3月) 35-52.
- Rendall, Jane. *Women in an Industrializing Society: England 1750-1880*. Oxford: Basil Blackwell, 1990.
- Shaw, Marion. “*Sylvia’s Lovers* and other historical fiction.” *The Cambridge Companion to Elizabeth Gaskell*. Ed. Jill L. Matus. Cambridge: Cambridge UP, 2007: 75-89.
- Shoemaker, Robert B. *Gender in English Society 1650-1850: The Emergence of Separate Spheres?* Harlow: Longman, 1998.

(同志社大学非常勤講師)

## Abstract

# Victorian Nursing and Female Influence: A Comparative Study of Gaskell's *Ruth* and Dickens's *Bleak House*

Sari NISHIGAKI

This essay aims to consider, from the viewpoints of history, class, and gender, the notion of Victorian nursing and its function in Elizabeth Gaskell's *Ruth* (1853) by comparing it with the same notion and function in Charles Dickens's *Bleak House* (1852-53).

There are certain similarities between *Ruth* and *Bleak House*. First, the heroines in both the works—Ruth Hilton and Esther Summerson—do well as nurses, with their nursing skill highly appreciated by the clients. Yet, both of them also have to pay a steep price for this appreciation: they both get infected by their patients' afflictions through their nursing, resulting in Esther's disfiguration and Ruth's death. Besides, both of them relate on some level with the term "fallen woman"—Ruth herself is a fallen woman and Esther is the illegitimate daughter of Lady Dedlock, who tries to conceal her past as a fallen woman. Becoming a nurse is a kind of atonement for both these women.

This essay also explores the differences between these the two novels. In *Ruth*, the heroine becomes a "professional" hospital nurse. Though nursing was regarded as a shameful occupation in the early Victorian era, Ruth's devoted nursing dispels people's prejudices regarding this profession. Despite the fact, she dies after nursing her former seducer and lover Mr. Bellingham without having morally influenced him in any way. Ruth's virtue is never rewarded, which symbolically signifies the fact that she is unable to escape the tag of "fallen woman" till the very end.

In *Bleak House*, on the other hand, Esther nurses her patients as an "amateur," and her nursing is a typical example of female "duty." Like Ruth, Esther also adopts a modern approach toward nursing and attends to her patients with care and kindness. However, her disfigured face plays an important role not only in concealing her identity as an illicit child but also in her realizing the value of "duty." By fulfilling her "duty" she embodies "virtue," which finally enables her to fulfill her desire of becoming Allan Woodcourt's wife.

In conclusion, the significance of both Ruth's and Esther's nursing lies in the expression of their female moral influence, one of the Victorian virtues. Through the act of nursing, both Ruth and Esther try to become virtuous toward other people, and characters such as nurses, who are looked down upon in society, actually succeed in becoming "heroines" in Victorian literature.

